

裏面白紙

勅語寫

朕東洋ノ平和ヲ維持シ國運ノ隆昌ヲ期
スルハ清韓兩國ヲシテ克ク其ノ領土ヲ保
全シ其ノ民人ヲ靖セシムルニ在ルヲ思ヒ
曩ニ内閣ニ命シテ英國政府ニ協商セ
シムル所アリシニ英國政府亦恰モ其ノ見
ヲ齊クシ今回相互ノ間ニ於テ締約正ニ
成レリ其詳細ニ至リテハ總理大臣及外
務大臣ヲシテ之ヲ説明セシム

勅語寫

朕東洋ノ平和ヲ維持シ國
 スルハ清韓兩國ヲシテ克
 全シ其ノ民又ヲ靖セシムル
 曩ニ内閣ニ命シテ英國
 シムル所アリシニ英國政府
 ヲ齊クシ今回相互ノ間ニ
 成レリ其詳細ニ至リテハ
 務大臣ヲシテ之ヲ説明セ

秘

日本國政府及大不列顛國政府ハ偏ニ極東ニ於テ現状及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ且ツ清帝國及韓帝國ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト及該二國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ茲ニ左ノ如ク約定セリ

第一條 兩締約國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ該二國孰レニ於テモ全然侵畧的趨向ニ制セラレ、コトナキヲ聲明

三條

然レトモ兩締約國ノ特別ナル利益ニ鑑ミ即チ其利益タル大不列顛國ニ取リテハ主トシテ清國ニ關シ又日本國ニ取リテハ其清國ニ於テ有スル利益ニ加フルニ韓國ニ於テ政治上并ニ商業上及工業上格段ニ利益ヲ有スルヲ以テ兩締約國ハ若シ右等利益ニシテ別國ノ侵畧的行動ニ因リ若クハ清國又ハ韓國ニ於テ兩締約國孰レカ其臣民ノ生命及財產ヲ保護スル為ニ干涉ヲ要スヘキ騷擾ノ發生ニ因リテ侵迫セラレタル場合ニハ兩締約國

孰レモ談利益ヲ擁護スル為ニ必要缺クヘカ
ラサレバ措置ヲ執リ得ヘキコトヲ承認ス

第二條 若シ日本國又ハ大不列顛國ノ一方カ
上記各自ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ別國ト
戦端ヲ開クニ至リタル時ハ他ノ一方ノ締約
國ハ嚴正中立ヲ守リ保セテ其全盟國ニ對シ
テ他國カ交戦ニ加ハルヲ妨クルコトニ努ム
ヘシ

第三條 上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國又ハ
數國カ該全盟國ニ對シテ交戦ニ加ハル時ハ

他ノ締約國ハ未リテ援助ヲ與ヘ協全戰鬥ニ
當ルヘシ講和モ亦該全盟國ト相互合意ノ上
ニ於テ之ヲ為スヘシ

第四條 兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ
經スシテ他國ト上記ノ利益ヲ害スヘキ別約
ヲ為サ、ルヘキコトヲ約定ス

第五條 日本國若クハ大不列顛國ニ於テ上記
ノ利益カ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ兩國政
府ハ相互ニ充分ニ且ツ陽意ナク通告スヘシ

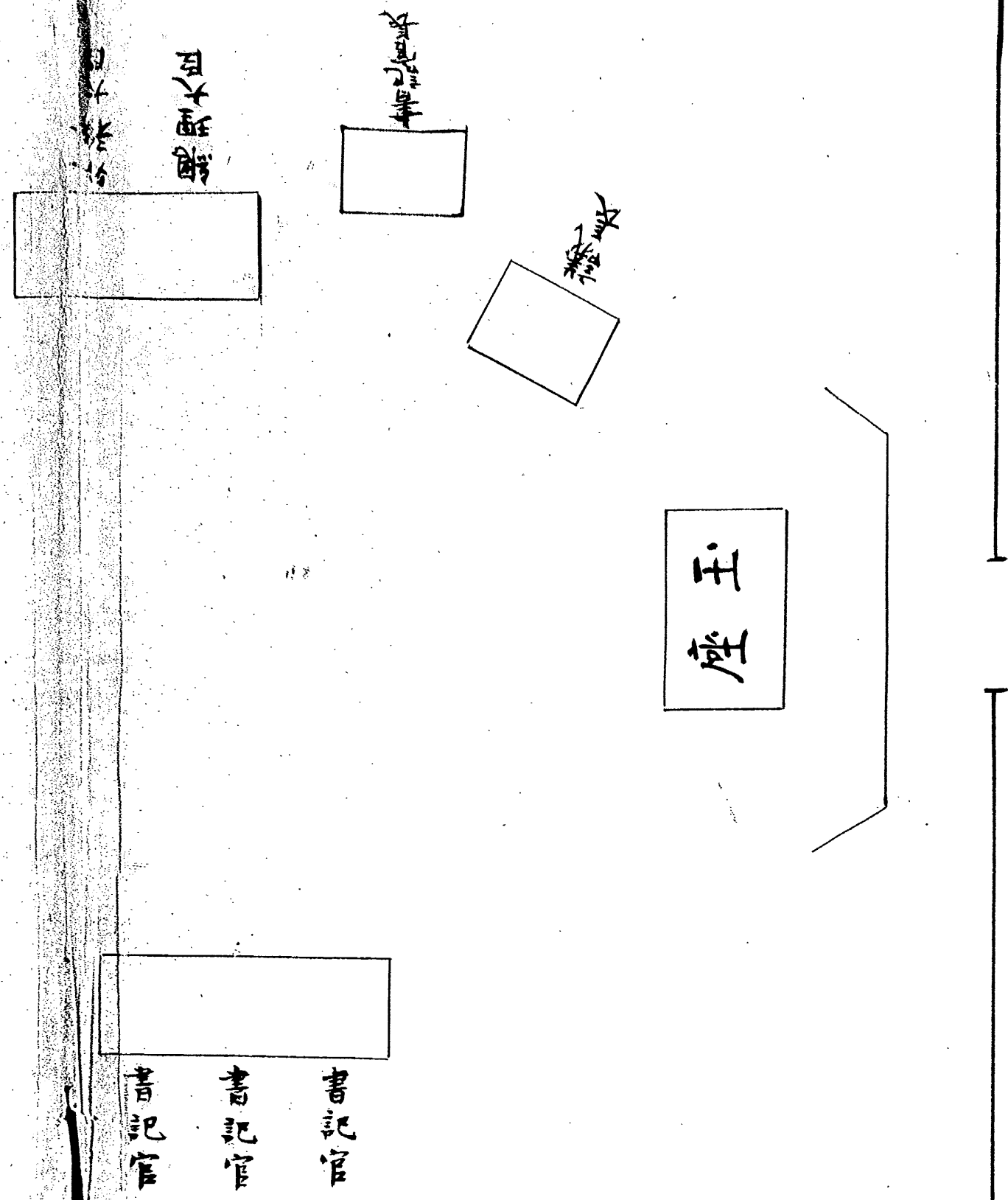
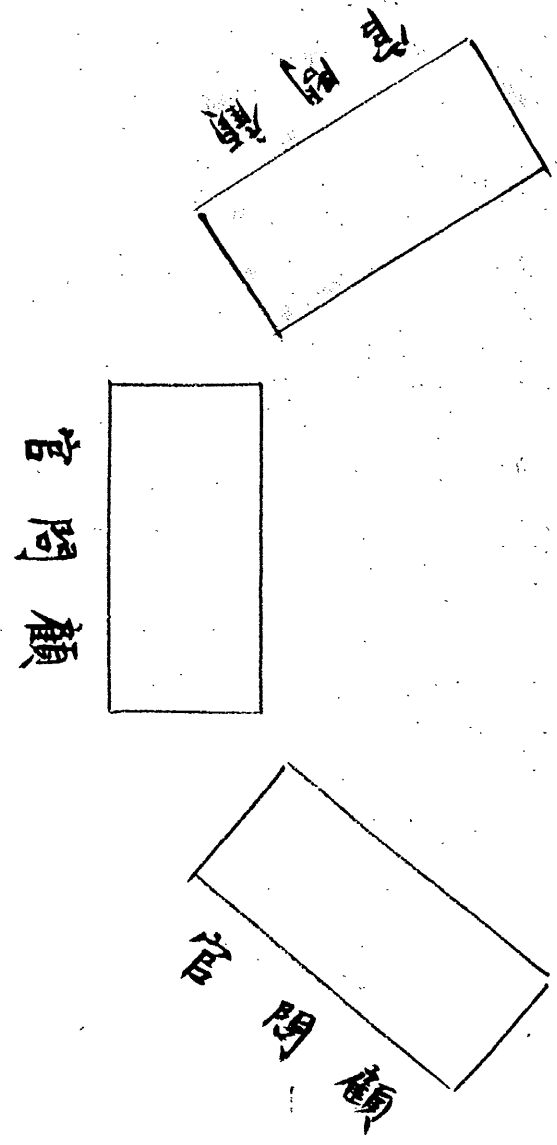
第六條 本協約ハ調印ノ日ヨリ直チニ實施シ

談期日ヨリ五ヶ年間効力ヲ有スルモノトス
若シ右五ヶ年ノ終了ニ至ル十二月前ニ締
約國ノ孰レヨリモ本協約ヲ廢止スルノ意思
ヲ通告セサル時ハ本協約ハ締約國ノ一方カ
廢棄ノ意思ヲ表示シタル當日ヨリ一ヶ年ノ
終了ニ至ル迄ハ引續キ効力ヲ有スルモノト
ス然レトモ右終了期日ニ至リ全盟國ノ一方
カ現ニ交戦中ナル時ハ本全盟ハ講和結了ニ
至ル迄當然繼續スルモノトス
右證據トシテ下名ハ各其政府ヨリ正當ノ委任

ヲ受ケ之ニ記名調印スルモノナリ
一千九百二年一月三十日龍動ニ於テ本書二通
ヲ作ル

大不列顛國駐劄皇國皇帝陛下特命全權公使林董印
大不列顛國皇帝陛下外務大臣 シンスタウン印

三十五年二月十二日東海遊藝場
臨時主席席次圖



明治三十五年二月五日

去月十二日英協約説明ニ関シ本院へ

下賜あり

勅諭寫一通入用ニ就キ本月内大臣秘書官

原恒太郎君ニ小牧書記官長ニ話有リ

即チ寫シ河村書記官ニ送付シ

送付スルニ依リ御答アリ

三ノ属

釋名

勅諭可也四行被

下及孝仁九行也

105(1/2)

相
家
際

河村重信

之

重信

河村重信